

## 【論文】

## シヨファイユの幼きイエズス修道会の靈性

— 幼きイエズスをめぐる人々の倫理的態度の考察 —

## Spirituality of the Sisters of the Infant-Jesus of Chauffailles

星野 正道

和歌山信愛大学の設立母体、シヨファイユの幼きイエズス修道会の靈性とその核となる幼きイエズスの誕生の場面に焦点を当てその誕生に関わった人々の倫理的態度について考察をし、信愛教育の聖書的基礎を確認してみようと思う。

キーワード：倫理、教育、靈性、聖書、カトリック

以下、上記の三つの項目について簡単に説明してみよう。

## 1 信愛教育の出発点であるシヨファイユの

## 幼きイエズス修道会の靈性の考察

和歌山信愛大学はシヨファイユの幼きイエズス修道会を設立母体として創立された四年制大学である。その教育の根幹にある信愛教育はカトリック教会内に創立された女子修道会、シヨファイユの幼きイエズス修道会の靈性にその出発点を持っていると考えられる。そこでここではシヨファイユの幼きイエズス修道会の創立、日本への渡来、日本社会における相互受容によって紡ぎ出された靈性について考察してみることにする。

## 1.1 信愛教育の最大の特徴

まず信愛教育の最大の特徴はカトリックの修道会、シヨファイユの幼きイエズス修道会会員である修道女たちによって設立されたというところにある。カトリック教会はカトリック新教会法典において修道会に次の三点を常に求めている(日本カトリック司教協議会教会行政法制委員会 1992)。

- ①会員の公的三誓願の宣立する
- ②兄弟的共同生活を営む
- ③世からの離脱を伴う証があること

①修道会会員は貞潔・従順・清貧の三誓願の宣立によって福音的勧告の遵守を公に誓い、教会の奉仕職をとおして自らを神に奉獻し、法に定められた権利と義務を有する者としてその修道会に合体される(同法第 654 条)。こうして修道者は教会をとおしてこの世界に働きかける神の意志と一体となってまず何にも増して愛をもって自らを神に献げるとともに、出会う人々のいのちへの奉仕のために自らの人生を献げることを目指す。

②修道会会員は自己の属する修道院に居住し共同生活を守らなければならない(同法第 665 条)。共同で生きることにより生まれも育ちも国籍も文化も年齢もちがう人々とともに生きることが教会の使命であり、神によって創造された世界の完成である神との親しい交わりとそれによってもたらされる全人類の一致のしるしと道具になっていく。この多様な人々との一致を実現する手段や方法と内面的修練は多くの人々が交流しつつ共同体を形成しようとしている現代社会を生きる若者への有効なメッセージとなる。

③この世界は極めて良いものとして神によって創造された(創世記 1-31)。しかし、未だ完成への道のりにある人間は神の思いに添うより自らの野心に追従することによってかえって苦しみへといざなわれている状態にある。人間社会は自然的に

は損するか得するか、快か不快かで動く。しかし、修道者は新約聖書の中でキリストによって示された生き方に従うためにこの世の原理を相対化する。修道者は自分たちの利益や名誉を目指してではなく、出会う人々、特に社会的に弱い立場におかれた人、さまざまなチャンスに恵まれない人、人口減少に悩む地方のためにもともに生きることを選ぶ。世からの離脱は世からの逃避を意味しない。世に埋没することも世から逃避することも端的に拒否し、神によって創造された世界の完成を目指して働く神の協力者として自分の生涯を差し出すことを意味する。

ショファイユの幼きイエズス修道会もカトリック教会の中に創立された修道会としてこの三点を常に忠実に実践してきた。この修道会の会員たちによって創立され運営されてくる中で、この三点は実際の教育現場での運営において学校の個性や雰囲気として定着することは十分に考えられる。

## 1.2 ショファイユの幼きイエズス修道会の歴史と日本 宣教

ショファイユの幼きイエズス修道会の歴史と日本宣教(ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区 2007a)のあらましを概観してみる。

- 1801 創立者レーヌ・マリー・アンティエ誕生  
同日受洗(11/19)
- 1823 ピュイの幼きイエズス教育会にて誓約
- 1846 ショファイユに支部を創立  
レーヌ・アンティエを派遣
- 1858 プティジャン神父  
ショファイユの修道院付き司祭となる
- 1859 ピュイのイエズス教育会ショファイユ支部は教会  
の要請によりショファイユの幼きイエズス修道会として  
新たに発足。初代総長レーヌ・アンティエ
- 1860 プティジャン神父 日本宣教に出発
- 1865 1月25日付の皇帝ナポレオン3世の勅令により、  
「教育事業及び病院事業」を行う修道会としてフランス  
国家から公式に認可される  
プティジャン神父 日本の信徒を発見(慶応元年)
- 1868 明治維新

- 1873 キリシタン禁教高札撤去
- 1877 プティジャンの要請に応じて会員4名 マリー・  
ジュスティヌ、センテリー、マリー・ベルナルディヌ、セ  
ン・フランソワ・ド・ボルジア、05/20 にマルセイユを出  
航、7/9 神戸に上陸 居留地にて養育事業を開始
- 1884 明治17年 4/1 大阪居留地2番に西洋女子技芸学  
校(信愛女学院)創設

ショファイユの幼きイエズス修道会が来日し日本宣教の使命を開始したのは1877年である。レーヌ・マリー・アンティエが教会の要請に従ってショファイユで本会を創立してかろうじて18年後のことであった。そのきっかけは1858年当時創立間もないショファイユの幼きイエズス修道会の指導司祭であったパリ外国宣教会の司祭、後の司教プティジャン師がすでに明治維新に先立って来日していたことによる。彼は完成したばかりの大浦天主堂で江戸時代の長い禁教下を潜伏キリシタンとして生き抜いてきた日本人を発見した。

その後明治維新になっても禁教の高札は取り下げられることなくキリスト教は迫害の対象であった。事実、長崎で幕末に起こった大迫害・浦上四番崩れは明治維新となってからも継続され、多くの殉教者が生まれている。このような迫害継続中、およびキリスト教黙認時代に日本の再宣教の全責任を担ったのが前出のプティジャン師も所属するパリ外国宣教会の司祭たちであった。彼らはこうした危険な状況でその責任を果たすため次の3つの女子修道会に来日要請を行った。これら女子修道会は寛大な心でそれに応えた。

- ・ 幼きイエズス会(明治5年・1872 来日)横浜上陸 雙葉学園
- ・ ショファイユの幼きイエズス修道会(明治10年・1877 来日)  
神戸上陸 信愛女学院
- ・ シャルトルの聖パウロ修道女会(明治11年・1878年)函館  
上陸 白百合学園

この3つの修道会は富国強兵政策をかかげる当時の日本社会でかえりみられず後回しにされていた棄児の養育と女性の教育から奉仕を着手した。これは当初より計画的に着手したというよりも、明治初期の日本社会で緊急に必要とされ、しかもだれも手をつけないでいることを神からの求めに応える姿勢で着手していったと言える。

プティジャン神父の要請で初来日するショファイユの幼きイエズス修道会のシスター4名は1877年5月20日フランス・マルセイユを出航し7月9日神戸に上陸した。

まだ疲れもとれぬ7月13日に2歳8ヶ月の女兒が、翌日には2歳半の男児がヴィリオン神父によって連れてこられた。旅装を解く間もないシスターたちにまず与えられた奉仕は寄る辺なき乳飲み子のいのちへの奉仕であった(ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区 2007b)。最初のシスター方の最初の使徒職がこのようなものであったことについてショファイユの幼きイエズス修道会は次のように受容している。「準備も整わぬうちに預けられた赤ん坊を寝かせるのに、旅行鞆をゆりかごにしたエピソードが今に伝えられている。幼子イエズスはベトレヘムの馬小屋で、聖母マリアと聖ヨセフに全面的にいのちを委ねる無力な存在としてお生まれになった。その名(幼きイエズス)をいただく本会の4人のシスターが、幼子イエズスのご境涯にあやかりながら、彼女たちに頼るほか生きる術のない孤児や捨て子を世話することから活動をはじめたのは意義深い。神への完全な委託のうちすべてを受け入れた彼女達は、摂理的に幼子イエズスにも孤児たちにも近いところに身と心を置いていたのである。偏見と猜疑心に囚われがちな大人が受け入れることの難しい神の愛と新しいいのちは、先ず人の世で最も取るに足りないと言われる無力な存在、全てを無条件に受け入れる孤児達に対し、このようにして注がれたのである。神はご自分のみ業をごく小さな、単純なことからお始めになることを好まれるようである」(ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区 2007c)。

このようにして始められた日本での奉仕の発端がショファイユの幼きイエズス修道会の創立からわずか18年しか経過していなかった。フランスのショファイユで修道会として発足したということはその地に多くの奉仕の要請があったことである。そのような環境の中で創立者・総長レーヌ・アンティエはあえて禁教令高札撤去4年しか経過していない日本へ4名の会員を派遣したのである。また派遣された4名の会員達は日本語の習得や修道生活の基盤の整わない中で、いわば神から要請される形で日本社会の闇と弱さの中で「いのちへの奉仕」という自分たちの霊性を受肉させていったのである。光と強さを目指して発展しようとする世にあって、闇と弱さの中にとどまって命の危機にある子どもたちへの奉仕を選んでいく姿の中にこの修道会は修道生活に普遍的に求められる世からの離脱を生きることとなった。ここにも全ての修道生活に求められ

その生活が証するよう求められている「世から離れる」精神が生きて生きていく。人間社会の常識や段取りに従うのではなく、飼ひ葉桶の中に身を横たえた幼きイエズスの道を自らに引き寄せ、すべてを神の摂理に委ねて奉仕を開始したのである。

### 1.3 グローバル時代における「いのちへの奉仕」

このいさぎよさはその後のこの修道会の奉仕のありようにも反映されている。その一例は人口減少をくい止め、若者達の学びの場を確保するために要請された和歌山信愛大学の設立を寛大な心で勇気を持って受諾した姿勢にも現れてくる。人口減少は単に人の数が少なくなることではない。自分のふるさとで未来を実現しようと願う若者達に仕事がなくそこを離れていかなければならない現実があり、ふるさとにとどまったとしても保育士不足で子どもを預けられない現実があり、共に家庭を築いていこうとするパートナーとの出会いと経済的支えが少ない現実となってあらわれる。そういった現代日本社会の中でこの大学の設立は修道会の霊性、「いのちへの奉仕」に新たな段階を切り開いているように見える。現代においてはいのち(命・人生・生活)がおびやかされるといふより、いのちを取り巻き支える人生と生活の状況自体が枯渇して来ているように思われる。そうした現状において「いのちへの奉仕」はさらに新たな切り口を提示しているように考えられる。ここに明治初期、将来の可能性もわからない日本に修道女を送り続け、社会の必要に迫られるようにして棄児の養育にあたり、男子の中等教育で手一杯の社会にあって一般女子の中等教育機関を設立したことに示されていると同質のものがここにも顕現してくる。すなわち時代の要求の中に神の意志を見て迅速にできる限りのことを行動に移す霊性である。この教育も福祉も「いのちへの奉仕」としてとらえて自分を精一杯提供しようとするところに信愛教育の出発点がある。その意味するところは「すべての人の生命が尊ばれ、すべての人がおん父からのたまものとして、その生命を喜んで受け入れ、愛し、尊重することができるように働きかける」(ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区 2007d)ことに集約される。ショファイユの幼きイエズス修道会のモットーは「いのちへの奉仕においては大胆に、忍耐をもって、人間の尊厳と、あらゆる状況にあるいのちの尊重、特に、危険な場におかれているいのちの尊厳のために、個人としても、共同体としても参与する」(ショファイ

ユの幼きイエズス修道会日本管区 2007e)である。この設立母体からあふれ出る人間へのまなざしをそれぞれの年代の教育機関で適切に伝え、各人の生涯離れることのないセンスとして身につけることが信愛教育共通の到達点となる。

グローバル化の時代、さまざまな状況の中で活躍し生活することになる現代の若者達にとって、ますますこの信愛教育が標榜する「いのちへの奉仕」のセンスは出会った多様な人々と良き関わりを構築する土台となるはずである。

## 2 ショファイユの幼きイエズス修道会の霊性

の基礎である幼きイエズスの誕生に関わっ

た人々の聖書的根拠と倫理的態度の考察

### 2.1 ルカ 1:26~38 マリアへイエスの誕生が予告される

この箇所は伝統的におとめであるマリアがなぜ子どもを宿すことになるのかといった興味から語られることが多い。しかし、メッセージはそのようなフィジカルなことに興味があるわけではない。v.32「その子は偉大な人になり、いと高き方の子といわれる」とある。いと高き方とは当時の人々が神を畏れ多いものと感じ、むやみに神の名を呼ぶことを避けたことからくる呼称である。端的に「神の子」のことである。確かにこの神の子はマリアから生まれることになるイエスをさしている。しかしキリスト教の前提としてすべての人は神の恵みによってイエスのありように似たものとされること。そのことによって創世記第1章27節で言われている「神は御自分(神)にかたどって人を創造された。神にかたどって人を創造された」と言う神の原初の創造意志と目的を恵みによって実現することに救いを見ようとする。ゆえにここで言われる神の子とは第一義的にはイエスをさすが、同時にこの人間イエスについて語られることは全ての人々の召命とも考えられる。現代において人の誕生は男女の交わりによって実現すると多くの人がとらえている。学生もそのように教育を受けている。確かに男女が出会わなければ人は誕生しないが、では現にここにいる現存在(Dasein ハイデガー)としてのこの私、すなわちこのような性格を持ち、このような知性と感性を持ち、同じ時代に似たような教育を受け

たにもかかわらず全く違った将来を思い描いている私を両親が計画することができるとは考えがたい。人間はだれでもただ存在者一般として生きているのではなく、このかけがえのない存在者、現存在として生き生かされているのである。人間存在をただ交換可能な存在者一般としてではなく、現存在としてのありようを実現することができるのは神のみである。ここでその神によって現存在へと呼び出された存在者としての人間をあらわすものとして、神の子という呼称を考えることも可能である。

このように考えてくると、ここで聖書は単におとめマリアの処女懐胎というイエスについてだけの神秘について語っていると言うより、歴史における世界内存在として地上を生きる人間についての神秘を語っているとも考えられる。こうして幼きイエス誕生の序章であるこの場面は全ての人間たちの本来のありようについて考察し、黙想することを迫ることになる。それは、ひとつの人間解釈であり、現代広く行き渡っている「人間の尊厳」「基本的人権」の起源を西暦紀元 80 年に著された世界の古典の中に確認することでもある。

さて、この箇所から読み取れるもう一つの大切なメッセージとしてマリアの態度を見る必要がある。27 節において二つのことが告げられている。一つはヨセフという青年と婚約中であること。二つ目はおとめであること。すなわち 30 節からで天使ガブリエルが告げることば、「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」は、救いの歴史においては確かに恵みであるが、イスラエルの一人の女性としてのマリアにとっては到底そのようには受け取りがたいメッセージである。突然何の準備もなく一人の子どもの母親になること、その懐胎が聖霊によるものであってそのことをマリアが受諾したとしても、婚約者ヨセフにこの出来事の実態を理解してもらえとは到底考えられない。このことに対する恐れがマリアの中に湧き上がるのは当然である。またヨハネ福音書8章の「姦通の女」の出来事の中で語られる「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じている」という律法規程が婚約者のいるマリアにも適応されることは明らかである。イスラエル社会におけるこのベーシックな規範倫理を犯した女性として見なされることへの不安や恐怖もまたマリアの中で大きくなっていく。

その時、マリアは人間が持っている合理的理性のぎりぎりのところで天使ガブリエルに次のように問うことになる。「どうして

そのようなことがありえましようか。わたしは男の人を知りませんのに」(34 節)。それに対して天使は「聖霊の力による」(35 節)と答える。第一原因としては神の力であることのみが明らかにされそれ以上の説明はない。ただ神の力による懐胎の先行事例としてマリアの親戚のエリザベトの事例が示される。エリザベトは当時の結婚適齢期に結婚して以来懐妊の気配のないまますでに子どもを授かる可能性のない年齢になっていた。しかし今、男の子を身ごもってすでに6ヶ月になっていると天使は告げた(36 節)。ここが人間理性への天使の説明の限界であった。その限界において天使は決定的な神の属性について語った。「神にできないことは何一つない」。この神の自己規定を再確認・再受容することで、マリアは自分自身の中に横たわっている自分の懐妊への疑問と、ヨセフに理解してもらえるかといった私的領域に根ざす不安、恐れ、そして律法の規程に反すると見なされることによって生じる社会的領域に根ざす不安、恐れの二つを脇に置くこととなった。そして自らの人間としての根本的召命、「わたしは主のはしため」であることを宣言することになる。

## 2.2 現代的靈性の試み 「課題の分離」

ルカ福音書1-26 以下でイエスの誕生がおとめマリアに告げられる場面が展開する。この場面は多くの芸術家の心を動かしてきた。フラ・アンジェリコ、レオナルド・ダ・ヴィンチはその代表と言えよう。

マリアは主の天使から突然、救い主の母になってほしいとの申し出を受けた。その時、マリアはダビデ家の子孫であるヨセフと婚約していた。当時の女性が時代精神に従って思い描く幸せ、つまり他家へ嫁ぎその家の跡継ぎをもうけ、幸せな家庭を築くことを彼女も夢見ていた。それは現代の女性観からすれば時代錯誤的に思えるかも知れないが社会的存在である人間がその時代の状況の中で幸せを夢見ることは当然のことである。しかしおとめであり婚約者がいる身でありながらこの主の天使の申し出を受諾すると言うことは、いわばその時代とその社会の外に投げ出されるにも等しいことであった。マリアはそのことを十分理解していたことであろう。ではどのようにしてマリアはこの主の要請と対峙したのだろうか。

このプロセスを現代人が理解するのに心理学者アドラーが提唱する「課題の分離」を応用して考察してみたいと思う(岸見・古賀 2013a)。「課題の分離」とは、たとえば目の前に「勉

強する」という課題があったとき、アドラー心理学では「これは誰の課題なのか？」という観点から考えを進めていくことである(岸見・古賀 2013b)。すなわちこのマリアへ受胎告知の場面にあてはめるとマリア、ヨセフ、父なる神、社会のそれぞれに課題は分散していると見た方がよいと思われる。まず父なる神の課題がある。マリアを選び、マリアに救い主の母となる使命を担ってもらって救い主を世にもたらそうと望むのは父なる神の課題である。次にヨセフの課題がある。マリアがその使命を引き受けおとめでありながら救い主イエスの母となった時、その事態を受け入れるか排除するかはヨセフの課題である。ヨセフ以外にこの決断はできない。また、当時のイスラエル社会の課題もある。マリアの説明を信頼せず、婚約者がいる身でありながら婚約者以外の子を宿すという罪を犯した女性としてマリアを石打の刑に合わせるのかどうかはイスラエル社会の長老達の課題である。こうして見てくるとマリアには父なる神の前ではまったく自由に応答するという課題だけが残されていると言うことが浮かび上がって来る。たしかに、神の望みに答えた時、婚約者ヨセフはこの事実を正しく理解してくれるだろうか、イスラエル社会の人々はわかってくれるだろうかという不安は残る。しかし、マリアには自分の力でこの人々の思考を神の意志に方向付けたり、自分の考えと合致させることは不可能である。マリアの課題ではないからである。また、父なる神の課題はどうであろうか。マリアに救い主の母となる使命を担ってほしいと望むことは当然のこととして神の課題である。マリアの課題ではない。このようにしてマリアにとって自分の前に提示されている課題はことごとく自分の課題でないことが明らかとある。その場合、自分の課題ではないから無関係だ、どうでもよいと言う態度をマリアはとったのであろうか。そうではないと思われる。

アドラーは「課題の分離」と共に「共感すること」の大切さについても述べている。「他者と交わるうでもっとも重要なことは他の人の目で見、他の人の耳で聞き、他の人の心で感じることだ」と言っている。(和田 2016)。マリアはただ機械的に「課題の分離」でことを処理するのではなく、この「共感すること」の中身を父なる神、ヨセフ、イスラエル社会それぞれの課題に向け、それぞれの相手の目で見、相手の耳で聞き、相手の心で感じることをしてみたと考えられる。つまりヨセフのマリアのことを愛していても自分の家系の嫁にすることはできない、だから密かに別れようという結論(マタイ 1-19)、イスラエル社会の長老達の律法によって裁くべきだと言う正義、そして父

なる神の救いの計画、それぞれを相手の目で見、相手の耳で聞き、相手の心で感じて見たのである。「課題の分離」をした上でこの「共感すること」の作業をすることで、マリアは自分が真心から共感できるものを自由に選ぶことが可能になってくるのである。そしてその選んだことを自分の課題として受け入れて行くことが可能となる。自分の課題でないものは背負わなくてもよいことへ十分に開かれている状況の中で、誰からも強制されるわけではなくあえて父なる神の望みを主体的共感の中でそれを自分の課題として選び取って行ったのである。マリアに見られるこの「課題の分離」の中で「共感すること」によって、人は新たな自己超越の地平に立たされることになる。そこで人は今ある自分自身を超え出て見知らぬ自分と出会うことになる。こうしてマリアにおいて最も端的に“人間は自分自身を越えるもの”として立ち現れて来る。

ただ「課題の分離」のみによってでは人はただ自分自身の中に閉塞され、自己の内包する超越的地平を実現することはできない。そしてまたただ「共感すること」のみにとどまっていたら自由な選びによって主体的責任を行使しつつ事を成し遂げ、自己や他者の思いを越えた超越的地平を切り開くことは不可能となる。

マリアが天使の言葉、「神にできないことは何一つない」(ルカ 1-37)に対して「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」(ルカ 1-37)と答えたプロセスから見えてくるのは、マリアがただ「従順であったから」と言った道徳的なレヴェルではないように考えられる。自分は何を課題にしていくのかといった聖霊に支えられた主体的な選定がそこにあることを忘れてはならないのである。そしてその主体的選びを行う場合には必ず自分自身の計画、気がかり、利益、こだわりから離脱する行程をたどることも押さえておく必要がある。主体的選びのプロセスでアドラーの言う「課題の分離」と「共感すること」を使ってみることは、一つの霊性神学的なヒントとなるのではないかと考えられる。このマリアの場面で聖書は、主体的選びは自分の思い描いていた夢とイコールではないことを伝えている。しかし、それにもかかわらず、そのイコールでないことを通して私たちの人生に普遍的にやってくる超越的地平の必然性を「受胎告知」は絵画的に語っているのではないだろうか。

## 2.3 ルカ 1:39~56 マリアのエリザベト訪問・ボランティアの起源

マリアのこの受諾について教会は次のように教えている。「アダムの子であるマリアは、神のことばに同意してイエスの母となり、心から、いかなる罪にもひきとめられることなしに、神の救済の意志を受諾し、子のもとで、子とともに、全能の神の恩恵によって、あがないの秘義に仕えるために、主のはしためとして子とその働きに完全に自分をささげたのである」(第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会 2014)。ここでは次の三点が言われている。①マリアが神の救済意志を受諾したこと。②子のもとで、子とともに、全能の神の恩恵によって、あがないの秘義に仕えることを人生の目的にしたこと。③主のはしためとして子とその働きに完全に自分をささげたこと。

マリアは救い主の母になることを受諾してそのあと、ただ母親になるための準備に邁進していたのではない。天使はお告げの中で、不妊の女と言われてきたマリアの親類エリザベトが高齢であるにもかかわらず身ごもっていることを告げた(ルカ 1:36)。救い主の母となることを受諾したマリアは自分の人生の中に子を迎え入れることになった。その時、子のもとで、子とともに、全能の神の恩恵によって、あがないの秘義に仕えることを人生の目的にしたマリアはその時自分が知る限りにおいて自分の助けを最も必要としているのは誰であるかを考えた。それは天使がお告げの中で語ったエリザベトであることは容易に理解できた。そこでマリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行ったのである(ルカ 1:39)。このマリアの時を移さぬ外的な行動力と今、知る限りにおいて自分の助けを必要としている人の近くにしようとする内的な選定力こそがボランティアの起源と言えるのではないだろうか。その意味でボランティアとは自分のやりたいことを無償でやることではなく、すべての人の幸せを願う神の望みに仕えることであり、今この時に自分の助けを必要としている人や事態に対して働き始めようとする子の働きに自分の都合や思惑を越えて同意し、行動していく行為である。人間の魂の深みに植え付けられている愛への乾きが子によって触発され具体的な形になっていく過程がこのエリザベト訪問の場面で明確にされている。マリアが人々に対して為した奉仕は救い主を出産するというたった一つの行為ではなく、全能の神の恵みによ

て子とこの働きに対して自分を沿わせることであった。つまり小さな日常生活の具体的な場面で愛に根ざした奉仕を気前よく差し出すことによってなされたこととらえることをこの場面は告げている。

## 2.4 マタイ 1:18~24 ヨセフへイエスの誕生が予告される

イエスの母となるよう選ばれたマリアはヨセフと婚約していた(マタイ 1:18)。ヨセフはマリアとは違うこの困難な課題をどのように受容していったのであろうか。マリアをテーマとしたルカ福音書において、イエスは「神である主は、彼に父ダビデの王座をください。」(ルカ 1:32)と述べている。このダビデ王の系統にあることをマタイ福音書はアブラハムからイエスに至る系図をかかげ、マリアの婚約者ヨセフが名君ダビデの末裔でありヨセフの家系をたどることによって(マタイ 1:1~17)、イエスはイスラエルの歴史の中で期待されてきた真の王、油注がれた者であることを示す。イザヤ書はこの待望について次のように語る。『イザヤは言った。「ダビデの家よ聞け。あなたは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りずわたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。それゆえ、わたしの主が御自らあなたにしろしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ」(イザヤ 7:13~14)』。こうしておとめを通してのインマヌエル誕生預言が告げられる。さらにその男の子の役割と使命についてイザヤ書は語る。『闇の中を歩み民は、大いなる光を見 死の陰の上に住む者の上に、光が輝いた(イザヤ 9:1)。ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威がその肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる(イザヤ 9:5)』。この来たるべき男の子は王であるが権威と権力を振りかざす王ではなく、人々にまことの王である神の望みを告げ知らせる使命を帯びた存在である。彼はこの使命ゆえにどこまでもへりくだり、しかも死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順な者(フィリピ 2:6~8)として生き生涯をささげた。

ダビデ王の末裔であるまことの王、平和の君(イザヤ 9:5)であるインマヌエルを実現しようという神の計画に協力するためにヨセフはどのような内的プロセスをたどったのであろう

か。

ヨセフは聖霊によってマリアが身ごもっていることを告げられる。ヨセフは正しい人であると記されている。その正しさは二つの意味が考えられる。第一はヨセフが律法を正しいものとして受け取りイスラエル社会において遵守しようとしている人であること。第二にはマリアをこよなく愛しているという点において正しい人と言われていること。第一の点においては当時の人々が目指したものである。もしこの点で律法に従って行動するならばマリアを石打の刑に処することが正しさとなる。そのことについてはすでに本論文 2.1 で触れた。第二の点において詩編は次のように言っている。「主よ、あなたは情け深い神 憐れみに富み、忍耐強く慈しみとまことに満ちておられる。」(詩編 86:15)。ここにまこと=正義は慈しみとともにあるのが神であることが示されている。ヨセフは自分のマリアへの愛=慈しみを生きることと正しい人であることを同時に具体化する方法として「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心」(マタイ 1:19)する。この記述の“表ざたにするのを望まず、ひそかに”という語調の中にマタイ福音記者はダビデ家を相続する立場にあるダビデの人間としてのギリギリの善意、愛と主への忠実さを表現している。ヨセフのこの決心は夢の中での神の介入によりさらに拡大され、結果的にマリアを妻として迎え入れ、彼はイエスの養父となることに帰着する(マタイ 1:24)。それは神の意志であるとともに、神の本性の現れでもある。

詩編 86 は 14 節から次のように述べている。

「神よ、傲慢な者がわたしに逆らって立ち 暴虐な者の一党がわたしの命を求めています。彼らはあなたを自分の前に置いていません。主よ、あなたは情け深い神 憐れみに富み、忍耐強く 慈しみとまことに満ちておられる。わたしに御顔を向け、憐れんでください。御力をあなたの僕に分け与え あなたのはしための子をお救いください。」

ここでは神が慈しみと正義に満ちており、神だけがその双方を同時に実現できることが述べられている。その反対に傲慢な者は律法を人間の論理で字義通り人間に適応し、正義を振りかざして人々を苦しめている。命を要求されるような刑罰にさらされている。しかしその態度は到底神の前に生きる者の姿ではないことが言われている(詩編 86:14)。ヨセフの最初の決断は密かにマリアと別れることであった。密かに別れなければ愛しているマリアの命は石打の刑によってイスラエル共同体による律法解釈によって奪われることとなる。しかし、イエ

ス到来より700年以上前、預言者イザヤを通して「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(マタイ 1:23、イザヤ 7:14b)と約束した神はご自身の本質、慈しみとまことの一致と協働をもって自らの計画を実現した。ヨセフはこの神の計らいによって「主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ」た。さらに産まれてきた男の子の養い親、養父、終生おとめマリアの夫となった。

## 2.5 まとめ

ショファイユの幼きイエズス修道会の霊性の出発点となるのはむろん、神の言葉に同意し、いかなる罪にもひきとめられることなしに、神の救済の意志を受諾し子のもとで、子とともに、全能の神の恩恵によって、あがないの秘義に仕えるために、主のはしためとして子とその働きに完全に自分をささげたマリアから産まれた幼きイエズスである。なぜならすべてのものの創造主である神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された(第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会 2014)。「神はこの独り子イエスを世に与えるほどにこの世界の救済を望んでおり、その神の意志にこたえて世に到来したイエスに似た者として、イエスのより近くからいのちへの奉仕を生涯選択し継続することがこの修道会のカリスマである。それゆえ幼子イエスの誕生にあたってより近くから従い、自らの生涯をこの幼子の出生に向けて差し出し奉仕したマリアとヨセフの生き方の中に、この修道会のカリスマが浮かび上がってくることは確実なことである。マリアは本論文でアドラーの理論によって考察したように自分の知性と論理的思考をもって神の使いと対話し、単に受動的に神に用いられたのではなく、自由な信仰と(自由な)従順をもって人類の救いに協力した(第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会 2014)。

またイエスの懐胎を知ったヨセフはマリアへの愛(慈しみ)と自らもその中で正義を生きている当時の社会構造である律法主義(正義)との葛藤状態にある。この社会構造はヨセフという一人の人間の意識を形成している。彼はこの意識を自力では乗り越えることのできないと考えた。ゆえに彼はマリアと密かに別れることを選ぼうとしていた。しかし、人間の思いを越える神は詩編86:15で語っているとおり、自らにおいて慈しみと正義を統合しヨセフの中にある愛と正義を実現することとなった。

このようにして幼子イエスを迎えるにあたって奉仕した人々

の倫理的態度が浮かび上がってくる。そこには当事者の働きだけが事態を進展させるのではなく、予測不可能な事態の中で働く第三項の働きが事態を進展させることが描かれている。とかく、自分の能力や責任、権威・権力そしてマネージメント力の中にだけ埋没して他者との倫理的道筋を切り開こうとする現代人に対して、もう一つの可能性をこの人々を通して提示していると読み取ることもできる。

ショファイユの幼きイエズス修道会の日本における出発点でシスター達が採択し、現在まで選定し続けている方法はこの第三項への信頼に開かれた責任ある倫理的態度である。

この人間の自己超越的倫理的態度を現代の若者達に伝え、彼らが人間とは自分自身を越えるものだという自己肯定感を得られるよう働きかけることは、現代社会へ向けての「いのちへの奉仕」の大切な要素である。

## 参考文献

- 岸見一郎・古賀史健(2013a)『嫌われる勇気』ダイヤモンド社  
岸見一郎・古賀史健(2013b)『嫌われる勇気』ダイヤモンド社  
ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区(2007a)『いのちの水の流れるままに』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部発行  
ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区(2007b)『いのちの水の流れるままに』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部発行  
ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区(2007c)『いのちの水の流れるままに』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部発行  
ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区(2007d)『いのちの水の流れるままに』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部発行 ショファイユの幼きイエズス修道会「生活の規範」第2章使徒的生活 26番  
ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区(2007e)『いのちの水の流れるままに』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部発行  
第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監修(2014)『第2バチカン公会議 教会憲章』カトリック中央協議会 教会憲章 56  
日本カトリック司教協議会教会行政法制委員会訳(1992)『カトリック新教会法典』第II集 神の民 第3巻 奉獻生活の



会と使徒的生活の会 第1編 奉獻生活の会 第2部  
修道会 第607条

和田秀樹監修(2016)『アドラーの100の言葉』宝島社